

## 教会 イエスの共同体

### 2. 教会一分かち合う共同体

- 教会が共同体であるかどうかは、教会じしんで選ぶ事柄ではない。本質的に教会は共同体であり、交わりを体験すべきものである。そこで、問題はどのような種類の共同体になるのかである。
- 定義
  - 新約聖書において、教会の交わりにもちいられた言葉はコイノニアである。新約聖書のなかに、およそ五十回ほどでてくる。基本的な意味は“共通してもっているもの”であり、聖書での訳としては、“交わり、共有、援助、分け与える、参加、仲間、ともにあずかる、施し”などがある。この言葉は霊的なもの、具体的、物質的なものの両方、つまり霊的、社会的、知的、経済的な、人生経験における全てを含んでいる。
  - コイノニアとはイエス・キリストのみこころに根ざす生き方を、意識的に人と分かち合うことである。真のクリスチャンの共同体あるいは交わりは、共通の信仰、キリストにある共通の生き方、主キリストに従おうとする共通の献身、等のなかで作りだされ、またそれらによって支えられるのである。
  - コイノニアのもつ意味を考えると、いまの教会で使われている「共同体」とか「交わり」がいかにか中身の薄いものであるかが分かる。コイノニアとはクリスチャン同士がときおり集まりをすること以上であり、気の合う人と顔を合わせるのが楽しみであるということ以上であり、教会の奉仕を仲間といっしょにするときの充実した幸福感以上のものである。  
ではコイノニアを特徴づける“より以上のもの”とは何か。
- エルサレムのコイノニア
  - ペンテコステ直後に成立した新しい神の民がどのようなものであったかをルカは使徒行伝のなかで描写している。その教会の生命を表す四つの特徴を、次のように述べた。  
「そして一同は①ひたすら、使徒たちの教えを守り、②信徒の交わりをなし、③ともにパンをさき④祈りをしていた」（使徒2：42）。彼らは自分たちのなかに働きたもう神のすばらしいみわざを互いに共有し合い、分かちあった。その徹底的でしかも永続的な分かち合いの関係がコイノニアと呼ばれた。それは交わり、生活共同体、あるいはお互い同士のコミュニオン（共有・一致）などの言葉で表すことができる。コイノニアは人間関係に霊的、社会的、経済的に全く新しい共同体をつくりあげた。なぜなら「彼らの中に乏しい（霊的、物質的）者は、ひとりもいなかった」（使徒4：34）のである。
  - このような過程を経るなかで、ひとりひとりの個人的な自己主張は消えていった。使徒の教えは全ての人々が共有した財産であり、キリストを伝える福音もまた共通の財産であった。キリストにより聖霊を通して示される神の豊かな恵みと力、それも全ての者によって共通に分かち合われた財産だったのである。同じように一切の所有物も全ての者に共有されるべき財産となった。兄弟関係のなかで祝われる食事が愛餐と呼ばれる由縁である。
  - エルサレムのコイノニアは財産を分かち合った結果、やがて経済的な困難に陥ったが、しかしこの

### 2 教会一分かち合う共同体

ことはペンテコステ後の教会の生き方を方向づけたのである。（ローマ12：13参照）

#### ・コリントのコイノニア

- ・新約聖書のコイノニアを理解するのに重要なもう一つの箇所はIコリント10章、11章である。パウロはコリントの教会で主の晩餐がゆがんだ形になってきたのを正そうとした。聖餐式とか、それに係わる神学論争などの色眼鏡をとってみると、イエスと弟子達の日常の、共同の食事を分かち合っているということが容易に見て取れる。
- ・イエスが弟子達と共にした最期の晩餐も、ユダヤ教の過ぎ越しの祭りの一部であった。それは特別な状況ではあったが、しかし同時に、イエスが何年ものあいだ弟子達とともに食べてきた日ごとの食事の一つにすぎなかった。
- ・十字架のできごとののちも弟子達は食事をともにすることをつづけた。ペンテコステののち、弟子たちの共同体が共同の食事をとる親しい交わりを続けたのはごく当然に思える。実際のところ、キリストの教会とは、その会員たちがパンとぶどう酒を共に分かち合うことを、少なくともその一部分とする共同体、と定義づけることができる。
- ・のちになって、この持ち物を分かち合うやり方は宣教によって異邦人の世界に伝えられた。コリントの異邦人クリスチャンは「各自は自分の晩餐をかってに先に食べても」（Iコリント11：21）よかったのである。パウロはこのことに対して「からだをわきまえないで飲み食いする者」（Iコリント11：29）として警告を与えた。
- ・聖餐の交わりは、その生活を分かち合う共同体を前提とする。聖餐という共同性のシンボルは、イエス・キリストの共同体が現実化していないところ、つまり分かち合うことが行われていないところでは意味をもちえない。プロテスタント、カトリックともにその聖餐の儀式的伝統には、コイノニアの具体的な現実を覆い隠してしまいがちな面がある。  
教会は「キリストのからだ」である、という事実にもとづく聖餐の神学を形成し、それを実践するように新約聖書はわれわれを招いている。

#### ・イエスとコイノニア

- ・イエスは弟子達に教会（メシアの新しい共同体）の分かち合いの生活について多くを教えられた。山上の説教はその代表的なものである。そのなかで二つの根本的な教えが並置されている。①暴力、強制的な力に対して②持ち物に対する教え、である。ローマ12章13、14節もこの同じ二つの主題が並置されている。両方とも、いのちは神の摂理のみ手によってのみ保証される事柄であるということを教えている。
- ・イエスの教える経済倫理を実践しようとするとき、人は社会の中で無防備の立場に身を置くことになる。力をふるう権利を捨てたことと同じ意味になるからである。しかしそれはこの世にあって、信仰に生きる、この世に生きるではなく信仰に生きることなのである。  
しかしこのことは、メシアの共同体という文脈のなかで理解されなければならない。時として混乱して、こういった箇所を学ぶさいに、個人主義的な考え方が入り込み、イエスの倫理は実際的でないといって捨ててしまったりする。
- ・イエスの所有物についての命令の①番目は「自分のために～地上に、宝をたくわえてはならない～

## 2 教会一分かち合う共同体

自分のため～天に、宝をたくわえなさい。」（マタイ 6 : 19、20）これはほかの人にたいして  
 気前よくふるまうように、ということである。（ルカ 12 : 21、32～34、18 : 22）

利己心を捨てた共同体になるように、弟子達が物質的なものの魔力から自由になるように、そして  
 互いに愛をもって仕え合うことができるように、イエスは求めておられる。

イエスの命令の②番目は思い煩ってはならないということである。「何を食べようか、何を飲もう  
 かと、自分の命のことで思い煩い、なにを着ようかと自分のからだのことで思い煩うな」（マタイ  
 6 : 25、31、34）。人間の生活の大部分はこういった生活に必要なものに関することである。  
 神なき民でなく、神の民として生きるようにイエスは呼びかける。天の父が摂理をもって守ってく  
 ださるその愛に自分自身を委ねるようということである。

③番目の命令はイエスの価値観が簡潔に示される。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうす  
 れば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」（マタイ 6 : 33）イエスは持ち物に  
 ついて、この世の順序と逆にするようにといわれる。そこが革命的なものである。神の国を待ち望み  
 つつ生きる愛の共同体を求めよとイエスは呼びかけ、そのうえで、すべての必要は満たされると約  
 束して下さる。

- どのようにしてこの約束が成就するのか。

マルコ 10 : 29、30 では「よく聞いておくがよい。だれでもわたしのために、また福音のため  
 に、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は、必ずその百倍を受ける。すなわち、  
 今この時代では家、兄弟、姉妹、母、子、および畑を迫害とともに受け、また、きたるべき世では  
 永遠の生命を受ける」。イエスはあらゆるものが分かち合われる新しい共同体を与えると約束して  
 くださった。信ずる共同体のなかに人は自分の家族を見出し、必要なものすべてが備えられてい  
 ることを発見する。たとえ迫害されることがあっても父なる神はわたしたちの必要を満たしてくださ  
 る。エルサレム教会のコイノニアはイエスの弟子達が体験したものであり、そして聖霊の力によっ  
 て実践されたのである。

- コイノニアと兄弟の交わり

- 新約聖書のコイノニアを表現するもう一つの言葉は「兄弟たち」である。この言葉は教会そのもの  
 を指し示し、福音書以外の新約聖書には二百五十回ほどでてくる。「多くの兄弟の中で長子」であ  
 られる方の働きの結果生まれた兄弟の交わり、そして「神の子たち」として知られた兄弟たちこそ  
 が教会なのである（ローマ 8 : 29、30、ヘブル 2 : 11～13）。兄弟の交わりとは互いが責  
 任と愛をもちあうこと、それぞれが神の家族の生活に参加すること、教会生活をすべて分かち合う  
 ことを意味する。つまり兄弟の交わりはコイノニアと同じ意味を持つことになる。
- イエス自身はこの言葉に新しい定義を与えた。兄弟姉妹、また両親とは神のみ旨を行う人たちのこ  
 とである。食料、衣服、互いの生活援助、その他あらゆる面で、彼らはそれぞれの必要を満たすた  
 めに仕えあう。（マタイ 25 章特に羊と山羊のたとえ）この兄弟関係のなかでは特別な名誉を表し  
 たり、優劣をつけるような階級・差別は存在しない。賜物や働きの点で区別はある。  
 「あなたがたは教師と呼ばれてはならない。あなたがたの教師はただ一人、すなわちキリストであ  
 る。「しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはならない（パリサイ主義のように）。あなたがたの

## 2 教会一分分かち合う共同体

先生は、ただ一人であって（イエス・キリスト）、あなたがたはみな兄弟なのだから。」（マタイ 23：10，8）

- ・教会生活のなかで、この兄弟の交わりを妨げるものが2つある。個人主義と制度主義です。

（アメリカの場合）個人主義とは自分自身の重要さと責任をあまりにも大げさに考え過ぎて、教会のなかの「兄弟関係」を忘れてしまうことだ。特徴は、自分のやり方を強引に推し進めようとする事、兄弟たちの助言や警告を無視すること、共同体全体の幸いより自分の権利を主張すること、自己中心のふるまいをすること、などである。一方、制度主義とは責任をわずか数人の人たちの手に委ねてしまう組織で「キリストのからだ」の本来の性質（賜物）を否定するものであるから、教会の構成員の参加を受け身にしてしまう（日本の場合はどうだろうか）。制度・組織は教会の目的に奉仕すべきであって、教会の基本的な性質・使命と衝突するものであってはならない。イエスの共同体においては、個人主義の問題は互いに責任をとり合う真実な関係を通して解決され、制度主義の問題は直接的な兄弟同士の関係、真実の生きた人間関係を維持することで解決される。

- ・コイノニアと教会革新

- ・教会のコイノニアは、兄弟愛を欠いた経済活動によって、その存在が脅かされることがたびたびあった。イエスは富める者が神の国にはいるのは非常に難しいと警告した（ルカ18：25）。持ち物に対する思い煩いはイエスに従う者にはふさわしくないと断言した（マタイ6：32）。コリントの教会に分裂をおこした要因の一つに経済上の差違があったという印象を受ける（Iコリ11章）。またパウロは「金銭を愛することは、すべての悪の根源である。ある人々は欲張って金銭を求めた為、信仰から迷い出て、多くの苦痛をもって自分自身を刺しとうした」（Iテモテ6：10）と言った。ヤコブもまた、教会のなかで富める者を特に歓迎しようとする誘惑を戒めている（ヤコブ2章）。新約聖書に現れる警告などを見ると、イエス自身もはっきり指摘されるように、財産は人間に対して悪魔的な力をもつ。それは人間の最も高い倫理的価値さえも捨ててしまえと誘惑しているかのようだ。
- ・使徒の時代以来、コイノニアは神学的な抽象概念ではなく、実際の体験であった。コイノニアが実際の面で力を発揮するために必要不可欠なものは、顔と顔を合わせる直接的な人間関係であるといわねばならない。小さなグループのなかで人々がお互いをよく知り合うようになるにつれて、コイノニアはより深いものになる。たとえば、倫理的な決断を下すための助言、互いの訓練のための助け合い、賜物が活用されるような勧め合い、日々の生活での助け合いなど。これらの基礎は、イエス・キリストを通してともに体験したという事実であり、彼らの内にある聖霊の力によって現実のものとなるのである。
- ・神の聖霊は教会の共同体体験を生み、それを深め、拡大する。ペンテコステ以来、共同体のなかのコミュニケーション、または共同体を通してのコミュニケーションに新しい道が開かれたのだ。それは丁度、バベルの塔の現実が打ち破られたようなものである。新約聖書を見ると、聖霊は何かの集団に与えられるのが常であった。個人に与えられるとしたら「キリストのからだ」全体の徳を高めるために、その人にあたえられた。コイノニアはイエス・キリストの教会の生命において本質的な要素である。教会の革新とはイエス・キリストの共同体の本質であるコイノニアを、自分たちの

## 2 教会一分から合う共同体

体験のなかで再発見ということなのである。